

学生の誤用法にみる冠詞の用法に関する小考

川 島 紀 美[†]

Usages of Articles: Typical Mistakes Made by English Learners

KAWASHIMA Kimi

Abstract

For English learners, understanding and mastering the usages of articles is an overwhelming task. Nevertheless, some audacious people have taken up the challenge. Through reading their English writing and checking the mistakes that students make, we have learned a number of things that have been overlooked. Moreover, the examination has provided opportunities to reconfirm word usage in sentences. In this paper, the discussion centers on the usages of articles. We have noticed several typical mistakes made by students in their writing. Some of these mistakes are isolated and subjected to analysis. It is hoped that the reader can apply some of our findings for teaching.

はじめに

冠詞と前置詞は、多くの英語学習者にとって、必ずしも与しやすいとは言えない関門であろう。特に、日本語を母語としている学習者にとって、日本語には存在していない冠詞の用法の習得は、一朝一夕にはいかない。しかし、全く手がかりがないわけではない。多くの素晴らしい辞書や参考書が星の数ほど書店や図書館に並んでいる。インターネットで簡単に検索できる現在、その気になればいくらでも情報を手に入れることができる。

しかし、ただ情報を入手し、一度目を通したぐらいでマスターできるほど外国語の習得

[†]大阪産業大学 全学教育機構 非常勤講師

草 稿 提 出 日 6月26日

最 終 原 稿 提 出 日 6月26日

は簡単ではない。長年、真摯に語学と向き合ってきた人ほど、そのことを痛感しているのではなからうか。結局は、丁寧に一つ一つの例文にあたって行き、できるだけ多くの英文に触れ、試行錯誤を繰り返しながら英文を作っていくという、とても地味な作業を根気よく続けていく他に道はなさそうである。

この研究ノートは、これまで担当してきた大学での授業や、また、個人レッスン等で行ってきた典型的な受講生の誤りをベースにして、改めて冠詞の理解を深めることを目的としている。ほんのささやかな一歩ではあるが、手ごわい冠詞というテーマに、改めて真摯に向き合うよい機会として取り上げてみた。これを機会に、今後もさらに冠詞というものの理解を深めていきたいと思っている。

1. “the factories in your city” それとも “factories in your city”

かつて筆者が学生の頃に受講していた商業英語の授業で、次のような課題が出題された。さほど優秀ではなかったせいもあり、以下のような英文を書いていたのを思い出す。

課題の日本語：

貴市において、以下の商品を製造している企業の所在地をお教え下さいましたら幸甚に存じます。

これに対する筆者の英文：

We would appreciate it if you could inform us of the addresses of the firms which produce the following articles in your city:

一見問題がなさそうではあるが、この英文は、明らかに1つ間違いを犯していることとなる。しかし、当時は、これでも意気揚々として提出したものである。その時、英語を教えていただいた仲間敬弼先生（現関西大学名誉教授）の辛抱強いご指導には今でも頭が下がる。なお、仲間先生のご著書『商業英語の語法』の中で、同先生が深い考察の必要性を説いておられ、定冠詞の用法についても詳述しておられる。縦のものを横にするだけでは英語の本当の力は身につかないと、同書に書いておられる。また授業においても、そのようにご教示頂いたことは今も忘れてはいない。

さて、この私の英文を、その表現しているニュアンスのまま日本語にしてみると、概ね次のようになろう。

－ 以下の商品を製造している企業の所在地を全てひとつ残らずお教え下さいましたら幸

甚に存じます。

少し誇張したかもしれないが、要はthe firmsのtheが問題であると考えられる。なぜなら、数えられる名詞firmsの前に定冠詞がつくと、all the firmsの意味となってしまうからである。ここは、単純にtheをとってしまえば何の問題もなかった。なぜなら、数えられる名詞の複数形を無冠詞で用いると、someの意味が付されて、この例であればsome firmsとなるからである。通常、一般的に販売されている商品であれば、製造している企業が一社しかないということは恐らくないであろう。よほど特殊な製品でもないかぎり、通常の授業で想定されている状況では現実味がないように思われる。

それでは、もし定冠詞もつけず、無造作にfirmとだけ記述したとしたらどうなるであろうか。すなわち、数えられる名詞を無冠詞で使用した場合である。この場合に伝わるニュアンスでは甚だ意味不明の英文ということになろう。なぜなら、数えられる名詞を無冠詞で使用すると、その名詞は数えられない名詞と化してしまうからである。

We would appreciate it if you could inform us of the addresses of firm which produce the following articles in your city:

貴市において、以下の商品を製造している企業であるということの所在地をお教え下さいましたら幸甚に存じます。

果たしてこのような曖昧かつ抽象的な言い方で、意味が通じるであろうか。確かに授業などであれば、多少誤った英文を書いていたとしても、おおむね何を伝えたいのか予想はつく。長年日本で英語の授業を担当しているネイティブの先生方であれば、きっとある程度は予想してくれるであろうし、多分、伝えたいことはそれなりに伝わるとは思う。しかし、来日して間もないネイティブの先生などは、何とも奇妙な英文に出会ってしまったと驚くことであろう。もちろん他人事ではない。学生の頃の筆者はこのような意味不明な文章を多く作成してきていた。そして今、学生たちの英文を添削する立場となり、そのことを改めて痛感させられている毎日である。

ちなみに、学生の英文の添削に際して、長年参考にしてきている座右の書とも言うべき名著がある。それは、『日本人の英語』『続日本人の英語』『実践 日本人の英語』（いずれもマーク・ピーターセン氏著）である。冠詞に関しては、この三冊を常に参考にしながら、辞書の例文にも目を通しつつ、担当しているライティング関連の授業に臨んでいる。この三冊

以外にも大いに活用しているものとして、『ここがおかしい日本人の英文法』（T.D.ミントン氏著 安武内ひろし訳）も挙げておきたい。特に時制に関する解説が素晴らしく、筆者にとって手放せない一冊となっている。

それでは次に、上記著書の中の『実践 日本人の英語』をベースにして、課題として学生たちに課したものをもとに、さらに話を進めていきたい。

2. “I work at the convenience store of Osaka.” それとも “I work at a convenience store in Osaka.”

学生に自己紹介の英文を書いてもらうことがある。すると必ずと言って良いほど、見出しの、前者のような英文に遭遇してしまう。言いたいことはよくわかる。つまり、

「わたしは大阪のコンビニで働いています」

と言いたいのである。しかし、前者はかなり問題がある英文であると言わざるを得ない。なぜなら、この英文のニュアンスは、「わたしは大阪が所有している唯一のコンビニで働いています」というような意味合いの文章になるからである。従って、とても奇妙なニュアンスを醸し出していることになる。

まずthe convenience storeの部分である。定冠詞のtheが数えられる名詞の前に付されるとall theのニュアンスになるが、その名詞が単数で用いられると、「唯一の」という意味になってしまう。大阪にコンビニが1つしかないなど、あるはずがない。このあるはずがない英文を随分目にしてきた。恐らく今後もしばしばお目にかかると思うが、こういう英文を書いてしまうのは、無理もないことである。

この文章では、of Osakaと続けているために、前のconvenience storeが限定されていると考えたのではあるまいか。従って、定冠詞のtheをつけたのだろう。確かに中学校の授業で、「限定された名詞には定冠詞をつけましょう」と教わったと筆者も記憶している。彼らにしてみれば、従って、教わった通りの英文を書いていることになろう。

すると、次に問題となるのは、限定のofということになろう。

いったい大阪が所有するコンビニとはどのようなものだろう。ここはin Osakaにして欲しいところである。すると、先ほどの英文は、

I work at a convenience store in Osaka.

となるであろう。「大阪にある一軒のコンビニでわたしは働いています」という意味の英文なら問題はない。

もちろん, theを付ける状況も考えられる。例えば何かの事件で最近有名になった「例の」コンビニで働いている, ということであるならtheが用いられるであろう。しかし, 特に皆に周知されているというわけでもなく, また何の説明も事前に記載されていないにもかかわらず, 突然theが登場してしまうと, たちまち理解に苦しむのである。

確かに, 常に数を意識しなければならない英語は厄介である。そこに冠詞の概念が入ってくるとさらに難しくなってしまう。もちろん英語には何の罪もない。ただ, 数の概念を曖昧にしている日常が当たり前の者にとって, 冠詞という品詞を持たない日本語を母語としている者にとって, という意味である。しかし, この壁を乗り越えなければまともな英文が書けるようにはならないであろう。ここは諦め, 覚悟を決めて取り組むしかなかろう。

この節の最後に, よく目にする自己紹介の迷文章を書いておきたい。きっと和英辞典を駆使したのだろう。もしくは翻訳サイトを利用したのかもしれない。前者はともかく, 後者を利用するときには, 解答をそのまま鵜呑みにしてしまわないように, その使用には大いに注意してほしいところである。最近の翻訳サイトの精度が上がってきていることは筆者も認めるところである。しかし, あくまで参考程度に利用するにとどめて, 自ら考えて試行錯誤を繰り返して欲しいものである。

学生の自己紹介より:

I am the student of OSU.

I am from Nara. I now live in Osaka alone.

I am lonesome.

I am playing soccer every day.

My hobbies are sleep and eat.

(以上は2019年度4月の授業「英語 (Listening and Speaking) I」で実施した作文の課題から学生の下承を得たうえで引用したものである。同じような記述が多く見られたため, 一部編集を施したが, いずれにしても引用を快く承諾してくれた学生には感謝したい。)

資料を提供してくれた学生自身は, まじめに取り組み, 書いてくれたものと筆者にはよくわかっている。しかし, どこがどうおかしいのか。そしてどのように修正すればよいのか。1つ1つ, その理由も丁寧に説明していくとなると, なかなか骨の折れる作業である。それと同時に筆者自身にとってはとてもよい研究材料でもある。感謝しなくてはなる

まい。

たとえば、先ほどのコンビニの例とも共通しているが、冒頭のI am the student of OSUである。ここでtheを使ってしまうと、「例の、あの有名な」学生という意味に解釈されかねない。しかし、その前に何の説明もないまま、theという記述でいきなり始まってしまうと理解しづらくなってしまう。

しかしそれにしても、である。大学に入ったばかりの学生の文章の中に、lonesomeという言葉を目にすると、何とも切なくなる。単語そのものは決して悪くはないが、場にそぐわない。まして、my hobbiesと限定しているのである。つまり、私の趣味はこれだけです、と言っていることになる。食べることと寝ることだけが人生の楽しみです、というニュアンスで書いているのである。

もちろん、彼らが言いたいことはわかりすぎるほどわかっている。他にも時制の誤りなどを含めるとかなり多くを訂正したくなるが、言いたいことはわかる。複雑な含みのないことも十分わかっている。しかし、冠詞や限定詞の用法を全く理解せずに何気なく書いてしまった文章には、このように多くの落とし穴が潜んでいることは意識して貰いたいものである。

3. たかが 'a', されど 'a'

仕事の性質上、かなり頻繁に学生の提出したレポートや課題に目を通し、添削をしている。課題では単純な英語を書いてもらうことが多い。筆者にとっては当たり前の日常的な作業の一つに過ぎないし、ある程度似通った誤用にも随分慣れてきている。しかしそれでも、未だに多くの落とし穴が冠詞のまわりに潜んでいることに、あらためて気づかされることは珍しくない。

まず日本語の文章というものが、いかに数を認識していないのかということに気づく。実は、冠詞を意識すれば自然と数というものにも意識が向いていかざるを得ないのであるが、日本語では数に対する意識が実に大らかであると言ってもよいかもしれない。この、数をあえて明言しないということで、しかしながら、私たちの生活は随分過ごしやすくなっていると筆者は思っている。もちろん、ビジネスの現場で、商品を注文するときなどはこの限りではない。「月末あたりの何処かの午後5時頃までに、黄色MサイズのTシャツをだいたい30枚かそこらあたりを納品してください」、などという発注は普通ありえない。

しかし、今お付き合いしている目の前の恋人に、かつて付き合っていた学生時代の恋人のことを伝えることをイメージしてみると、状況は少し違ってくる。この場合、仮に20人の異性とお付き合いしていたとしても、「はい、付き合った人は少しいましたよ」とほん

やりと答えておけばよい。日本語ならこれで十分であろう。聞いた方は、「きっと三人ぐらいだろうな」と勝手に都合よく解釈してくれるであろう。

しかし英語ではこうは行かないであろう。日本語にはない数の概念が意識されるからだ。たとえば次のような会話を想定してみよう。

A: I wonder how many boyfriends you had when you were in college.

B: Ah, yeah. Actually, I had a few.

A: A few? You mean two or three?

B: Yeah, maybe a few more. I'm not sure.

A: You aren't? It's odd. It isn't so long ago, darling.

B: Yeah, I know. It was not long ago. Ah, can we change the subject, honey?

A: No! I am afraid no! Tell me exactly the number. Am I the fifth? The sixth? Or...

B: OK. I had some boyfriends. I admit.

A: Some means?

B: Stop it. That's enough. A few or some or whatsoever. It doesn't matter! The matter is that I am with you right now. Right? I can't believe you at all, airhead!

A: Me neither! Besides, you called me airhead. How dare you? Take back now!

B: No, I won't. It can't be taken back.

A: Why not?

B: Because it's already out.

もしこの会話で、Bの女性が 'I had a few.' と言わずに最初から 'I had few.' と言っていたら、結末はかなり違っていただかもしれない。また、Bはsomeなどを使ってそれなりにぼやかした表現も使って話しているが、このことがかえってAのいら立ちを誘っていることも興味深い。正直に言ったほうが良いのか、上手にオブラートに包むほうが良いのかわからないまま、なんとなく気まずくなってしまった二人の会話の例である。実際にこのような会話をしている恋人がいるかどうかはともかく、冠詞といえどもあなどれない、ということを示してみたかったのである。

4. 「私の友達」と 'my friend'

友達とのことを書いてもらおうと、必ずと言って良いほど、my friendという表現が無造作に出てくる。たとえば、

I went to Hokkaido with my friend last month.

などと書いて提出してくる。一見何の問題もなさそうな文章である。しかし、はたして my の持つ限定的な意味を意識して書いているのかどうかは疑問である。

仮に友達が一人しかいないのなら、英文としては問題ない。なぜなら、所有形容詞の my は定冠詞の the と同じ限定的なニュアンスを持っているからである。また、単なる友人の一人 ‘a friend of mine’ ではなく、まさに友達と心から呼べる人物である、というニュアンスを意識して書いているのであれば、こちらもまったく問題はないのであるが、おそらくは、ほとんどの学生たちは特に何も意識せずに「わたしの友達」という意味で書いているであろう。

この点に関して、前述のマーク・ピーターセン氏のご著書の中でいみじくも指摘しておられることがある。それは、中学校や高等学校で使用されている教科書において、所有形容詞に関する扱いが必ずしも好ましいものではない、ということであった。

確かに明確な説明が必ずしも施されていない、ということは考えられる。そこで、実際に筆者が手元に所有している中学校のテキスト（『New Horizon English Course 1』東京書籍、平成26年刊）を調べてみたところ、気になるいくつかの事例が見つかった。

例 1

Kevin, this is Becky.

She's my new friend.

She's from Canada.

（はたして新しい友人が一人だけなのかどうかかわからないが、この書き方を見る限りでは、そのように解釈できてしまう。もしくは、友達と呼ぶのはこの人のみというニュアンスなのかもしれない。そのあたりの説明は、担当教員から加える必要があるであろう。）

例 2

She is my grandchild in Japan.

（彼女には一人しか孫がないというニュアンスが伝わる英文である。しかしテキストを読むと、『彼女』には二人の孫がいることになっているので、この英文では矛盾してしまう。）

例 3

The Earth is our mother, and we're her children.

（まさに地球は唯一の母なる地球であるし、私たち人類はすべてその子供であるという素敵な英文である。後半のwe're her childrenはwe're the children と書いても同じニュアンスとなる。はたして、ここまでの説明を中学校の一年生にしたとしても、100%理解してもらえるかどうかはわからない。ただ、英語指導者としては意識しておきたいところだ。）

ここでは所有形容詞を取り上げてみたが、あらためて中学校のテキストを読んでみると、将来の英作文に影響を及ぼしかねない記述が、所有形容詞にとどまらず、いくつか見つかった。しかし細かな指摘はまた別の機会に譲ることとしたい。

決して英文が間違っていると言っているのではない。また、カリキュラムの関係で、かなり時間的な制約を受けておられるであろう先生方のご苦勞も理解しているつもりだ。しかし、テキストの記述の中には、明確な説明を加えないままでいると、誤解を招くであろうものが含まれている可能性は否定できないように思われる。

5. 英字新聞は生きた教材

中学校ならびに高等学校のテキストも、さらに、筆者が日々授業で利用している大学生向けの英語テキストも、様々な工夫がなされているものが実に多い。指導に際して予習をしていると、筆者自身がとても多くのことを学んでいる。感謝の他はない。ただ、残念ながらauthenticityという観点から見ると、若干の物足りなさを感じることも否めない。

そこで、英字新聞を授業に取り入れることを時々視野に入れて指導している。もちろん、著作権の観点からコピーなどはできないため、取り上げるテーマに沿って、実際の文章を読んで聞かせるにとどめ、少し易しい日本語に変えたものを英訳させるなどして活用している。活用してみるとなかなかおもしろい。その時々興味あるニュース記事と文法項目を絡めると、何より担当者自身が楽しめるのではないだろうか。筆者は毎回楽しんでいる。

たとえば、以下のような英文が今回のテーマ「冠詞」に使えるそうだ。いずれの例もThe Japan Newsからの引用である。

例 4

The sudden rupture has roiled global stock markets this week, inflaming anxieties among exporters, markets and industries that had been lulled into optimism in recent

months as both sides steadily announced progress in their efforts to end the trade war Trump started last year. (Friday, May 10, 2019 ; 突然の決裂が今週世界の株式市場を震撼させている。トランプ大統領によって昨年に始まった例の貿易戦争を終わらせるべく、両者の努力が順調に進んでいるとの最近の公式発表に楽観的な見方をしていた矢先のこと、輸出業者や市場関係者の間に懸念が広がる。)

上記のmarketsとindustriesは、それぞれ数えられる名詞の複数形であるので、someのニュアンスが付されていることとなる。従って、「すべて」とは言及していないわけである。recent monthsもしかり。これは何ヶ月とは限定せずに、ざっくりと言及している。しかもrecentはどれぐらいの最近なのかも定かではない。ある意味、日本語の数を明言しないスタイルと共通しているようだ。the trade war はまさにtheの限定的なニュアンスが反映され、「懸案の」とか「話題になっている例の」ということとなる。

この用例だけでも、数の概念や冠詞の用法を説明するよい機会を十分提供してくれている。

例 5

China announced earlier it would impose higher tariffs on a range of U.S. goods, including frozen vegetables and liquefied natural gas, a move that followed Washington's decision last week to hike its own levies on \$200 billion in Chinese imports. (Wednesday, May 15, 2019 ; 冷凍野菜や液化天然ガスを含む一連の米国商品に、より高い関税を課すとの中国の公式発表は、中国の輸入品2000億ドルに対して高い関税を課すという、米国が先週下した決定に対する一つの動きである。)

この用例では、さらっと書いているfrozen vegetablesという部分を取り上げて、theなどの限定詞を付していないために、some frozen vegetablesというニュアンスを伝えていくということの説明すると良いだろう。5, 6品かもしれないし、100品かもしれない。こういう曖昧な記述が、実は正確さを信条としているであろう新聞の記事には多いようだ。

おわりに

日々の英語指導の中で出会う様々な英文の添削を通して、常日頃から気になっていたいくつかの問題点の中で、今回は特に冠詞に焦点を当ててみた。余りにも身近な冠詞ではあるが、その奥の深さは、英語指導に携わっている者なら誰もが味わっていることだろうと

思う。筆者もまさしくその奥の深さに悩みながらの日々を過ごしている。学生たちの英文に限った事ではない。むしろ、筆者の拙い英文を見るたびに、嘆息が漏れることも1度や2度ではない。

冠詞、そして数の概念はとてつもなく謎に満ちているように感じる。いつまでたっても腑に落ちないもどかしさを味わいつつも、それでも英語という言語の魅力には抗えない。実に厄介で、そして楽しい仕事を選んだものだと思う。

まだ当分は冠詞に関しての用例を集めていくこととなろうが、先程も述べたように、学生たちの英文添削を行う中で、気になっている点はまだまだたくさんある。前置詞や接続詞の誤用など、枚挙に暇がない。こういったものを順次取り上げていきたいと思っている。指導者としても、また研究者としても甚だ未熟ながら、今後も日々の指導活動と並行して、用例を集め、引き続き研究を進めていきたいと思う。

参考文献

- ピーターセン，マーク（1993）『日本人の英語』岩波書店
ミントン，T.D.（2000）『ここがおかしい日本人の英文法』研究社出版
仲間敬式（2004）『商業英語の語法』大修館書店
ピーターセン，マーク（2013）『実践日本人の英語』岩波書店
ピーターセン，マーク（2016）『続日本人の英語』岩波書店

参考資料

- 笠島準一，関典明他36名：「New Horizon English Course 1」，東京書籍，2014